

登録有形文化財
旧長濱検疫所一号停留所

明治の面影を色濃く残す建造物



厚生労働省

横浜検疫所

登録有形文化財の登録内容

名称	旧長濱検疫所一号停留所（厚生労働省横浜検疫所検疫資料館）
登録年月日	平成30年（2018年）5月10日
所在地	神奈川県横浜市
建設年代	明治中期／大正後期改修
特徴等	<p>検疫対象者の旧宿泊施設</p> <p>コの字形平面で、外観は下見板張りと上下窓（あげさげまど）を基調に、両端突出部の先端にベイウインドウを設けて変化をつける。</p> <p>横浜最古級の洋風建築として貴重な存在</p>
種別	建築物 文化・福祉
基準	造形の規範となっているもの

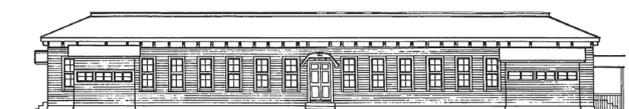
建造物構造概要



南立面図



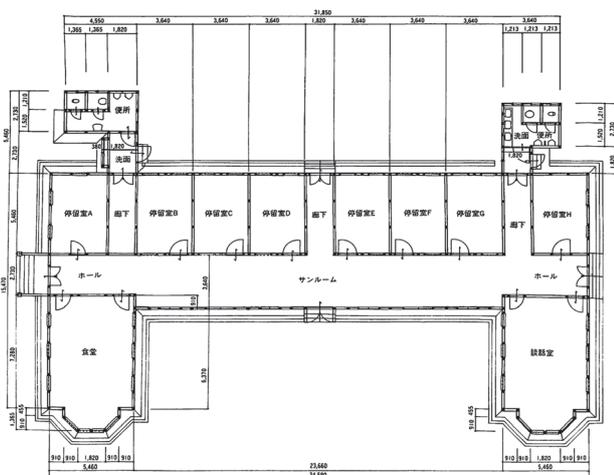
西立面図



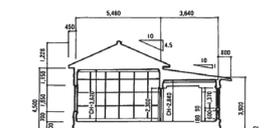
北立面図



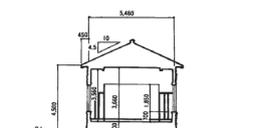
東立面図



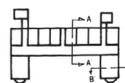
平面図



A-A'断面図



B-B'断面図

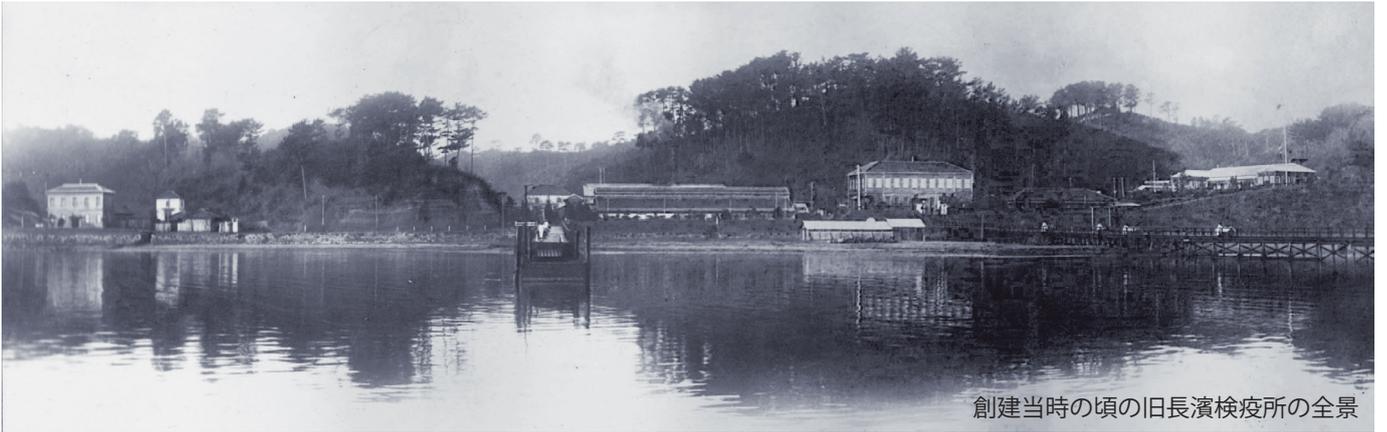


参考

- 長濱検疫所は、日本最初の検疫施設である長浦消毒所を引き継いだ日本の検疫施設最古の遺構の一つであり、その日本検疫史上に占める位置は甚だ大きい。
- 検疫資料館（一号停留所）は、長濱検疫所のなかでも建築意匠的に重要な施設であり、長濱検疫所の建築の粋がこの建築物に収斂して残されており、それはまた、富士屋ホテルや日光金谷ホテルや奈良ホテルと並んで日本の洋風ホテルの最初期の遺構とも目されるものである。
- それらが和風意匠を主題としたホテルに対して、横浜検疫所の検疫資料館の建物はまったくの洋風であり、純粋に洋風の最初期のホテル遺構に類するものとして、建築史に占める価値は大きい。

* 吉田綱市横浜国立大学名誉教授による『「一号停留所」の歴史的価値について』（平成27年(2015年)）より抜粋

■ 一号停留所創建当時の旧長濱検疫所全景



創建当時の頃の旧長濱検疫所の全景

一号停留所は、旧長濱検疫所の上等船客用の停留施設として明治28年（1895年）3月に完成しました。（上記写真右端の建物）大正12年（1923年）9月の関東大震災によって小傾斜しましたが、翌年に復旧工事を行い、今日に至っています。

建物は、ほぼ東西に長く、南面の両側が突出したシンメトリック（左右対称）な構造となっています。8つの部屋（一室2人用）と食堂・談話室があり、検疫で停留が必要となった方々が一定期間滞在していました。

■ 一号停留所の内部風景



廊 下



食 堂



談話室

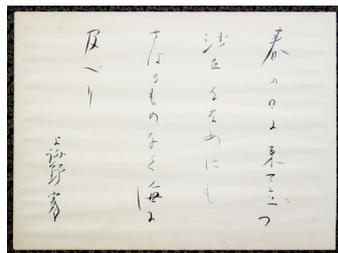
■ 多くの著名人の来訪

長濱検疫所では、多くの著名人等をお迎えしていました。来所いただいた際にお名前などを記入していただいた「記念揮毫帳」のほか、与謝野鉄幹(寛)や与謝野晶子などの短歌や、後藤新平の揮毫などを現在も保管しています。



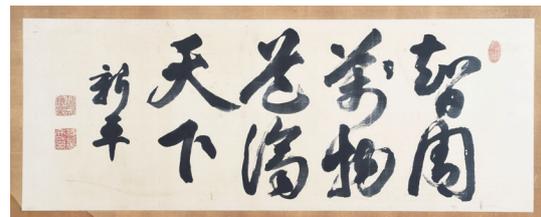
磯山の松風のおと終えずして
船の川にふと雲づくく空

与謝野 晶子
昭和7年(1932年)

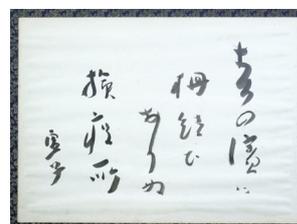


与謝野 寛
昭和6年(1931年)

春の日に来て立つ
沙丘なめにも
ささるものなく海に
及べり



智 薬 園
天 倫 物
下 倫 園
後藤 新平



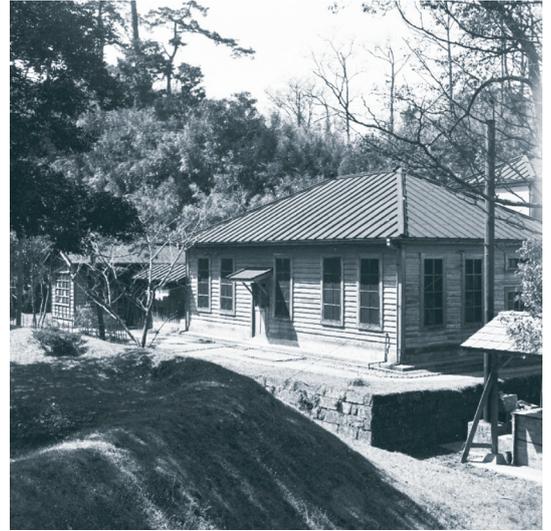
春の浜に
柵結ひ
ありぬ
検疫所
高浜 虚子

野口英世の活躍

医学者。細菌学者。福島県生まれ。幼名は清作。野口英世は医術開業試験に合格したのち、伝染病研究所（現東京大学医科学研究所）を経て、明治32年（1899年）に、長濱検疫所の海港検疫医官補として採用されました。

海港検疫医官補として採用されてまだ間もない時期に、折から入港した亜米利加丸（アメリカ丸）の検疫に従事し、船艙で苦しんでいた中国人船員からペスト菌を検出しました。

この出来事が野口の名を、一躍伝染病関係の医師や海港検疫医の間に知らしめることとなりました。



写真左は海港検疫医官補時代の野口英世
〔(公財)野口英世記念会所蔵〕

野口英世が細菌検査に従事した細菌検査室

問い合わせ先 厚生労働省 横浜検疫所 総務課
電話番号 045-201-4458

所在地 横浜市金沢区長浜107-8

アクセス 京浜急行
▶能見台駅より 徒歩約15分
横浜新都市交通線
(シーサイドライン)
▶幸浦駅より 徒歩約15分
JR新杉田駅前から
横浜市営バス294系統
▶なぎさ団地前下車 徒歩約10分

※ 通常、一般公開は行っていません。
一般公開の際は、下記のホームページにて
ご案内いたします。

<https://www.forth.go.jp/keneki/yokohama/>

